

「昨日弟さんがお見えに。てっきり交代で来られたのかと」
 「年生の少年が訪れたという。一年、もしかすると成長の早い小学校五、
 「どんな子供でしよう？ 人相や体格、特徴的な仕草など……」
 「弟はおろか、面識のある親戚の子もいないのだからきいてもしよ
 うがないのだが、ちよっとあえずきいてみた。大人しそうな、控えめ
 「何ていうかな子で……昔の子供みたいだな。大人しそうな、控えめ
 に笑う静かな子で……」
 「アッ、そういえば目がそっくり！」
 「再び瞳孔をあげ剛の顔を凝視した。」「
 「何か伝言のようなもの、残していかなかったでしょうか？」
 「さっだん興味が湧いてきた。」「
 「ああさうも言ったように住職の娘はついでくるように促し、もと来た
 道を引き返した。」「
 「本堂を兼ねた自宅にもどると、ドアを開けた女は剛を玄関に招き
 入れ、固定電話をのせたミニタンスの引き出しを開けた。何かの冊
 子を取り出した。黄ばんで縁の摩滅した和綴じの台帳のようなもの
 だった。縦に罫線が入り、住所と氏名、たまに電話番号が並んでい
 た。」「
 「女は頁を繰っていちばん最後の書き込みを指で押さえた。」「
 「いちおう任意でお名前、ご連絡先をきいてるんです。あなたもよ
 ろしければあとで……台帳を手に肩を寄せてきたので、剛はのぞきこも
 うとした。そのたん、手に肩を寄せてきたので、剛はのぞきこも
 「アッ、ダメよ！ 帳面に閉じた。」「
 「バサッ」と乱暴に帳面を閉じた。」「
 「駅に到着するとパネル式の発車時刻表を見上げつつ、
 「あと三分か……」
 「改札機にSUICAをタッチし通り抜けようとした時、軽妙なチ
 ャイムが鳴って両サイドから肌色の板が出てきた。」「
 「いつもはそんなに遠距離まで電車に乗る機会がないから、けっこ
 うな額の料金を支払っていたことにその時初めて気づいた。それよ
 りも、自販機にもどってチャージしようとしてSUICAを投入した時、
 「残高がピタリ¥0なのに驚いた。」「
 「無事に改札を抜け跨線橋を渡ってホームに下りた時、その暗合に
 ついて、まだほんやり考えていた。」「
 「もちろん単なる偶然に過ぎないが……」
 「剛はポケットから小さなメモ帳を取り出し、さっき書き込んだペ
 ーシを開いた。」「
 「ハクイ市ハクイ24……」
 「住職の娘に別れを告げ、寺の門をくぐり抜けた直後メモしたもの
 だった。」「
 「一瞬チラッと見えただけだから、それしか読み取れなかった。台

脚の選モ熱ど皆静腕拳ふなと「か
 の選拳テ血どうをかに腕げさかとして思二ざ
 震拳と漢だを制にをを、わったい七わ
 え当はらはしみに組火したっ選出番ざ
 が日はら、し！みみ、がくかてばし
 時、打しやた「黙っい点なからも
 を演っくっの「てた人だ望こ中タの
 超壇て剛のみに止そよ、別にだ候補
 えの変の目ないめ様子ウラスそク
 て上わをいかてをを全員か担任の
 今にったま。く。見ていたから熱い
 の立ちそっ。変れるかと思イヤ、
 剛に全の様。ぐ。見。優。メ。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 伝校子。が。優。メ。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 わ生徒。を。ダ。メ。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 ったを。前。か。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 の前に。か。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 が。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 気。な。め。た。た。普。段。の。コ
 が。し。と。な。め。た。た。普。段。の。コ
 つ。の。た。た。普。段。の。コ
 と。の。た。た。普。段。の。コ
 ソ。の。た。た。普。段。の。コ
 フ。の。た。た。普。段。の。コ
 ア。の。た。た。普。段。の。コ
 の。の。た。た。普。段。の。コ

七歳以下の子は戸籍上では浩二には存在しないとのことだった。その可能性は十分ありえない。話は別、そして生前の父の素行から戸籍謄本をリユックにしまい、かわりにメモ帳を取り出した。また最後の書き込み頁を開いた。

「ハクイ市ハクイ24：：」

「なかつた。初めて聞く地名なので、ウイキペディアや市の公式ホームページを閲覧した。」

北陸地方らしく、日本海を望む美しい海岸線、新鮮な魚介類を味わえること以外、年間十数回UFOが目撃されるため地域おこしとして「UFOのまち」を前面に押し出していることしか目を引くものはない。

さらに周辺サイトをのぞいていると、ふとある記事が目にとまった。「羽咋を舞台にした作品」として松本清張作「ゼロの焦点」が挙げられていた。物語のあらすじは：：

主人公禎子は新婚一週間目にして出張に出かけた夫が失踪してしまふ。夫の手がかりを求め、出張先の金沢へと向かう禎子。同じ頃、石川県の自殺の名所として知られる海岸に身元不明の遺体上がる。警察からの連絡で禎子は遺体の確認のため羽咋の海岸へと向かうのだ：：

自：：。自転車のサドル、盗難に注意、盗られたら警察、盗られるのも警察、出：：。アパ：：トの前の空き地で、浩二が見たことのない自転車にまたがっ：：。異様な存在感だ。滴るような深紅に輝き、スパイ映画の秘密兵器みたいにダルも古びていたが、近づいてみると赤いフィルム以外、サドルもペダルの剛には爪先した。大きな屈かなかつた。友達と自転車どうしで出かける：：。とゆっく：：漕いでもあつた。友達を引き離してしまふのだった。チェーンがなく、ペダルの回転が車輪に直に伝わるからだっ：：。せ：：う：：か：：。合：：う：：に：：立：：て：：な：：ぜ：：か：：別：：人：：に：：み：：え：：た：：の：：は：：警：：官：：に：：挟：：ま：：れ：：て：：る：：せ：：い：：か：：。数：：日：：後：：、：：剛：：が：：学：：校：：か：：ら：：帰：：ると、：：ア：：パ：：ー：：ト：：の：：前：：に：：三：：人：：の：：男：：が：：身：：を：：寄：：せ：：合：：う：：に：：立：：つ：：て：：な：：ぜ：：か：：別：：人：：に：：み：：え：：た：：の：：は：：警：：官：：に：：挟：：ま：：れ：：て：：る：：せ：：い：：か：：。は：：浩：：二：：だ：：う：：に：：立：：つ：：て：：な：：ぜ：：か：：別：：人：：に：：み：：え：：た：：の：：は：：警：：官：：に：：挟：：ま：：れ：：て：：る：：せ：：い：：か：：。も：：し：：れ：：な：：い：：。た：：が：：、：：な：：ぜ：：か：：別：：人：：に：：み：：え：：た：：の：：は：：警：：官：：に：：挟：：ま：：れ：：て：：る：：せ：：い：：か：：。り：：他：：人：：の：：よ：：う：：に：：無：：反：：応：：に：：視：：線：：を：：も：：ど：：し：：た：：。見：：た：：浩：：二：：だ：：つ：：た：：が：：、：：や：：は：：ス：：コ：：ッ：：の：：一：：人：：は：：し：：や：：が：：ん：：で：：自：：転：：車：：の：：赤：：い：：フ：：レ：：ム：：を：：何：：度：：も：：突：：いて：：いた。塗り：：官：：の：：よ：：う：：に：：無：：反：：応：：に：：視：：線：：を：：も：：ど：：し：：た：。濃：：い：：緑：：色：：の：：地：：肌：：が：：の：：ぞ：：い：：た：。剥：：が：：れ：：、：：赤：：い：：粉：：末：：が：：地：：面：：に：：こ：：ぼ：：れ：：た：。濃：：い：：緑：：色：：の：：地：：。

「飛び降りるビルを探してあちこちの屋上に登ったけど。やっぱり濡れたオールの首筋をぬぐいながら、と勇気がいるよ。」
 「た。到着後しばらくたったようで、同じ車両に客の姿はなかった。」

「電車を下りると、人の流れるまま橋を渡り、SUICAをチャージして改札の前まで来た。時刻と時計を見比べた。発車まであと一時間も差があった。駅の改札を出た。センターでバンドメンが、都のテイストを取らないクイルでスタイリッシュな、しかしこの間、三〇分が過ぎた。あわてるモイルをさまよううち、あっといふ間に和菓子が過ぎて。あわてて「金沢銘菓 売上No.1」とポップの立つ機械で特急券を買って。乗券を買おうとサイフを握りしめた姿勢のまま、固まってしまった。乗券を買おうとサイフを握りしめた姿勢のまま、もう一本、あとでも。予定、このまま特急に乗ればちょうど七時半過ぎには着くはずだ。一本出ている。」

「もう一本遅らせれば八時半過ぎ。」
 「前の出番になる予定時刻は九時、アンコールを除けばラストか、その別にも打登場と許さるべきだ。」
 「仮にもグスタフ、許さるべきだ。」
 「グンと大きくふれる。」

「明日は土曜日、ライブ終了後どうせ朝まで演者・客とも飲みかすはずだ。それならば飲み会のさなか、酔ったバンドをバックに歌ってみたい。それと、いやはやそのほうがいい。」

「結局、忘年会の余興みたい。もう核心はすぐそこにある。」

「聞きに来る奴など誰もいない。誰にもいないように。」

「さあ、これからどうすれば……」
 「た。羽咋駅に降り立つと、空はもう暗くなりはじめ、体感真冬の寒さだ。駅前前のバスターミナルを兼ねたロータリーはガラんと広がる。民宿や個人食堂、土産物屋や釣具屋などがそれを取り囲んでい

「またメモ帳を開いた。「ハクイ市ハクイ24……」
 「電車内で調べたところ、羽咋市羽咋という地名はなく、最も近いのは「羽咋町」だった。ところがその羽咋町も番地の前に「ア・イ・

に乗ろうとする。1・2・3・4……。左手を丸め、顔の前に掲げ

Who are you?
I don't know.

Who am I?
I am SATO.

どこにでもいる SATO

砂糖だらけの日本中 like フレンチトースト SATO

切り餅も SATO

しゃぶしゃぶも SATO

薬局も SATO
ソウの乗り物かんぜ

コインで動く 一千万でも動かんぜ

十・二百・三千・四万 俺を動かすのは SATO

一・三・二・一・四万 世界に一人だけ SATO

四・三・二・一・四万 俺のブルの後ろには頭と肩の上端しか見

J・B・I・S・を・見・と・、 世界に一人だけ SATO

かなった。慣れた手つきで機材をセッティングは出来ない。黒っぽいパ

い・な・い・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

え・な・い・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

爆音の光の豪雨の深か、被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

意識の薄皮の豪雨の深か、被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

た・ま・に・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

力・ま・に・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

た・ま・に・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

通・話・を・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

い・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

の・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

が・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

に・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

も・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

あ・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

お・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

ト・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

を・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

と・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

の・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

う・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

を・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

客・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

離・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

さ・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

な・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

か・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

っ・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが

た・。 被ってある顔は全く見えぬ。気がかりな動きが